

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

※ここまでのあらすじ

体調がよかったころの私は、美しいものに心をひかれ、ちょっとした贅沢を試してみたくなる。そんなときは、丸善（学生のあこがれの洋書を扱う大型書店）に行つて、香水や煙管などを小一時間もかけて見たあげく、一番高い鉛筆を一本だけ買ってみたりしていた。しかし、肺の病に冒されてからは、その丸善に行くのも気が重くなっていた。ある日、ちよつと思議な感じの八百屋で檸檬を買つた。特にめずらしいものではないのだが、単純な色彩、寸詰まりな紡錘型、ひやりとした触感や香りなどが、「私」の心を弾ませた。私は檸檬を眺めながら町を歩き、気付くと丸善の前にいた。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすやすと入れるように思えた。

「今日は一つ入つてみてやろう」そして私はずかずか入つて行つた。

しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壇にも煙管にも私の心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻つた疲労が出て来たのだと思つた。私は画本の棚の前へ行つてみた。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！と思つた。しかし私は一冊ずつ抜き出してはみる、そして開けてはみるのだが、克明にはぐつてゆく気持はさらに湧いて来ない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなつてそこへ置いてしまふ。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまひには日頃から好きだったアングルの橙色の重い本までなおいつその堪えがたさのために置いてしまった。——なんという呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になつてしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒し終わった後、さてあまりに尋常な周囲をおり見廻すときのあの変にそぐわない気持を、私は以前には好んで味わっていたものであつた。……

「あ、そうだそうだ」その時私は 袂（注2）の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そうだ」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰つて来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去つたりした。奇怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなつたり青くなつたりした。

やつとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中

へ吸収してしまって、カーンと冴えかえっていた。私は埃ほこりっぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

① 不意に第二のアイデアが起こった。その奇妙なたくらみはむしろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、なに喰わぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐったい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行った。

変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにおもしろいだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉葉みじんだろう」

② そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下って行った。

(梶井基次郎『檸檬』による)

(注1) 画本・・・絵を集めた本

(注2) 袂(たもと)・・・和服のそでの下の部分

問一 「不意に第二のアイデアが起こった」とあります。第一のアイデアと第二のアイデアを簡単にまとめて書きなさい。

第一のアイデア

第二のアイデア

問二 なぜ「私」は問一のような行動をとったのでしょうか。あなたの考えを書きなさい。

問三 ②の文はどのようなことを暗示していますか。

「檸檬」「丸善」「想像」という三語を使って説明しなさい。

《解答例》

問一

第一のアイディア

画集を手当たり次第に積み上げて、その上に檸檬をのせること

第二のアイディア

檸檬をそのまま画集で築いた城の上に置いたまま帰ること

問二

病におかされる前はわくわくした画集を見ても、今は心がおどらないため、その不安を吹き飛ばしたかったから。

問三

檸檬という爆弾で丸善を爆破することを想像することで気詰まりな状態から一時脱したが、元の日常に戻っていくことを示している。

《解説》

この小説は、一九二五年（大正十四年）に発表された。中学生には、やや古い文体で、見慣れない漢字も多く、読みにくさを感じるかもしれない。しかし、丁寧に読んでいくと、今も変わらぬ魅力が伝わってくる。

病におかされて、今まで自分があこがれていた書店の美しいものや高価なものへの魅力を感じなくなってしまった自分に感じる不安。しかし、自然の美を凝縮したようなたった一つの檸檬がその不安をぬぐい、爆弾として書棚に置いてくる。不安に感じさせた書店を木っ端みじんにする想像をして、不安が消える。

今まであこがれていた香水の壺びんや煙管きせるや画集は、皆がよいというから自分もよいと思いついていたにすぎなかったのだろう。何気ない一個の檸檬の中に自然の美（単純な色彩、寸詰まりな紡錘型、ひやりとした触感や香りなど）を見出すことで、世間の俗っぽさに気付かされたのだろう。

この作品は、若者に受け入れられ、当時の丸善には、たくさんの檸檬が書棚に置き去りにされたそう。